

# News Letter

自治医科大学地域医療オープンラボ

Vol.9 August, 2007

文部科学省「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

## 医療技術トレーニング部門開設

実験医学センター センター長(新潟5期) 小林 英司

昨今、医療技術は循環器系治療におけるカテーテル技術、消化器系における内視鏡技術、さらに外科系全般に導入された鏡視下手術技術など高度な技術が革新的に進んでいます。しかし、これらの技術取得には、確立した教育方法がなく、医療事故につながった例などがマスコミを取り上げられ社会問題になっています。本学は、今後さらにすぐれた臨床医を養成するために実験医学センター内に「医療技術トレーニング部門」を設置しました。その設置目的は大きく3つ掲げられています。

### ①卒前教育

開学以来、外科で継続されてきた実験動物（過去は譲渡犬使用）による実習を充実させ、シミュレーション教育と連携をとる。

### ②卒後教育

本学附属病院に勤務する医師を対象に救急処置、鏡視下トレーニング等の研修を行なう（運営には、患者さんの寄付により設立された熊倉記念基金運営委員会（堀江久永委員長）があたる）。

また、本学医学部卒業生の短期（2週間から数ヶ月）研修を卒後指導委員会（梶井英治委員長）と協力して受け入れる。さらに本学関連の女性医師を対象に子育て後の復職支援として女性医師支援センター（桃井真里子センター長）を通じて短期技術研修を受け入れる。

### ③技術研修を主として学会や企業の研修会を受け入れる

学内の教員が主催または協力する学会・研究会の技術講習会を受け入れ、企業との共同研究の活性化をはかる。

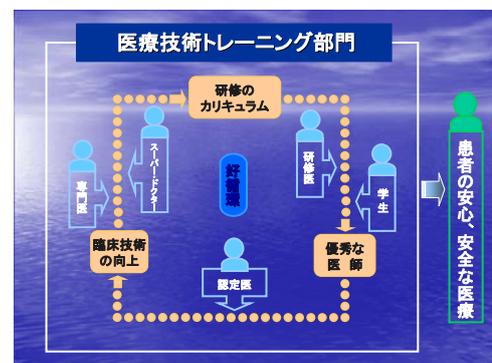
これらを遂行するために現在、専任教員の設置、カリキュラムの整備、施設の改装など急ピッチに進んでいます。生きたブタで技術練習をする部分が入っているため通称「ピッグセンター」と呼ばれていますが、決してブタを使った実験だけを指すものではありません。短期研修コースの中には、臨床での術者経験のマネージメントも検討されています。鏡視下トレーニングに例えると、ボックスなどのシミュレーショントレーニングからはじまり、生きたブタで技術修練、最終的には患者さんで安全に修練を行なうトータルとしての研修コースです。



この4月12日、本部門の開設記念式典がケンブリッジ大学名誉教授ロイ・カーン卿をお迎えして行なわれました。今年度外科学の選択必修 BSL の動物実習において優秀であった学生二人（田島千沙子さんと堀川修一君）が代表として花束を贈呈しました（写真）。

現在、カリキュラムは対象者のレベルや環境により個別に作成されます。5年生が行なっている外科学実習の例があります。このようなカリキュラム作成は、卒後研修センター（早瀬行治センター長）とも連携を図り、特に新しく着任したアラン・レフォー教授も鏡視下トレーニングを初め英文作成など協力してくれています。この制度はさらに認定医や専門医に必要な臨床技術の向上につながり、最終的に患者さんの安心・安全の医療を提供できるポジティブ・スパイラルを生み出す社会提案として大きく期待されています（図）。

現在、各診療科と連携し短期研修コースの案を自治医科大学のホームページで見れるよう準備しています。今後、多くの卒業生に役立つよう準備したいと思っていますので、興味ある方は下記まで問い合わせください。



自治医科大学実験医学センター 医療技術トレーニング部門  
担当：高梨・安藤／電話：0285-58-7456 (e-mail:piglet@jichi.ac.jp)

## 本学医学部卒業生の学位取得状況把握のためのアンケート結果 その5

9～11期生のご意見を自由意見記載欄より抜粋しました。

**【9期生】**◆他大学にはないシステムをつくり、地域医療を続けながら学位が取れるように宜しくお願いします。◆現在の地域医療をつづけながら研究が出来、それを評価していただける制度があるとはしりませんでした。◆自分なりのテーマが思いついた時に研究に結びつけるために相談できれば心強い。◆認定医・専門医・学位を取得する上で義務年限が障壁にならないように最大限努力してほしい。◆県によっては博士号取得のチャンスがなく、あきらめていた人達にとっては、たいへんありがたく、歓迎されると思います。◆後輩達の選択肢が増えることは良いことですので、がんばって下さい。◆日常業務が忙しすぎるのが最大の難点だと思います。◆母校で、地域にいながら学位が取得できることはとても好ましい。◆自治医大に入学すると卒後に学位が所得しにくいという情報が受験生の大学選択に際して過度に意識されることを危惧していましたが、社会人大学院入学卒のシステムが活用されて学位取得を希望する人が1人でも多く実現することを願っております。◆専門医制度の充実により、学位のステータスが低下しているようにも思いますが、実際は違ふと肌で感じております。◆社会的インパクトは上のどの専門医よりも大きかった気がします。◆基礎研究に従事し、論文を書くことにより、その後の臨床に対する考え方が大きく変わったと実感しています。◆10年近くをへき地で過ごす自治医大卒業生にとって臨床経験を積むことはもちろん大切ですが、研究にも従事できれば非常に意義深いことだと思います。

**【10期生】**◆義務年限内に研究と学位の足がかりができるとはうらやましい限りです。学位がほしい卒業生にとってはオープン・ラボは福音だと思います。◆専門医制度や医療の細分化された現状では学位の **advantage** が少なくなっているように思いますが、時間をかけてテーマに打ち込むことが診療の際のもののみかた、考え方を広げることに有意義だと考えます。◆指導教員の質の向上。◆論文博士が廃止される方向とのことですので、それに代わる社会人入学、オープン・ラボの意義は大きいと考えられます。◆地域社会あるいは医学の進歩に役立つ人材育成をこれからもお願いします。◆研究テーマを自由に出し合い大学が萌芽研究を研究費でアシストしていく体制が必要。◆向上心のある、しかし環境にめぐまれた方々にはすばらしいシステムだと思います。より多くの人がこのチャンスを生かせる様に期待します。◆地域にいてもすばらしい研究ができるが、自分からはできないものに、そういった点を指摘・指導して下さい。◆地域にいても取得できる学位はよいが、やはり大学などの研究機関に実際に出向けるような配慮が必要。どうしても地域から出不精になることが多いです。◆地域から出られずに希望があるにも関わらず博士号が取得できなかった方も大勢いると思います。それを解決するよい手段だと思いますので是非成功させて下さい。

**【11期生】**◆地域で医療に従事しながら勉強できる道が開かれれば素晴らしい。◆卒業生にとってより良いシステムを作っていただきたい。◆県によっては機会にめぐまれない場合も多いと思われるので、このような制度を充実させていって欲しい。◆へき地医療の充実発展を考えると、今後はへき地医療に従事(関連)する者による研究(論文)により、深みのある医学を追求する時期に来ている。◆学位は結果でなく、過程が大切だと思う。◆研究していくには、自分の興味・思想はもちろん大切であるが、研究の環境というものも大きい。常に研究の空気に触れられる状況を何らかの方法で作っていただけるとありがたい。◆義務年限中は地元で働かなくてはならないという条件があり、それは学位取得には障害になる。◆学位を取得するというより、研究をおこなうことから医師として視野を広げることになるため、絶対に必要なことである。◆自治医大卒業生が学位を取る場合、義務年限および地域医療活動のため、他大学卒業生に比し、かなりのハンディがある。興味を示す卒業生に対し、**follow** する必要がある。また、他大学に居候して実験していくことも困難な場合があり、折角、自治医大を卒業したのだから同大学で高度な研究ができることを望みたい。学位取得後も高度な研究を探求しているが、よい環境を求めている卒業生がいることを知っていただきたい。◆できるだけ大学院の門戸は広く開けていただくのがよい。義務年限中に研修先の大学もしくは病院で学位の仕事をするのは大変です。◆県によって事情はさまざまであり、自治医大卒業医師の研究生活のスタートが遅れるハンディについてはよく理解している。社会人大学院制度は画期的なものであり、今後の成果に期待している。

自治医科大学大学院医学研究科

### 地域医療オープン・ラボ運営委員会

事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1  
TEL 0285-58-7044/FAX 0285-44-3625/e-mail [openlabo@jichi.ac.jp](mailto:openlabo@jichi.ac.jp)  
<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>